

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

talk baton 14 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などぎっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



今回は初の試みである、マイクロソフトが開発したアプリケーションの「Microsoft Teams」を利用した、遠隔地による場所を選ばない対話型・参加型のトークバトン。

各参加者は自社での自席や会議室で、画面を見ながらゲストとのトークセッションを実施。※準備も含めて数名はMicrosoft大阪事務所から参加ゲストの問いかけに対して、映像を見ながらTV電話による会話と、質疑に対して文字として回答を書き込むチャットを体験し、離れた場所でのコミュニケーションの可能性についても効果を検証することができた。

■はじめてのTeamsの利用

佐野：さのひろです。名前がチャームポイントで、平仮名で4文字という、なかなか周りの男性ではないと思います。タイに1年住んでいました。佐野寛、タイで検索するとたくさんヒットしますが僕ではありません(笑)。大阪大学で建築を専攻していました。意匠設計ではなくて、構造のほうで、プレストレストコンクリートの耐性などをシミュレーションするような研究をしていました。そういうことが楽しくて就職先はIT業界を選びました。今日は皆さんTeamsの利用ははじめてだと思いますが、思ったことをどんどん

書いていって下さい。書かれた意見に対して皆さんで気づき等が得られると良いなと思っています。ぜひ参加型トークバトンで進めたいと思っています。

■ITとの距離

佐野：今日は建築とプログラムというタイトルですが、広くITとも捉えて話します。今建築の仕事がされていて、ITとどれくらいの距離を感じていますか。

参加者：「正直そんなに近くは感じていません」「最近ではヴァーチャルリアリティなどの進化で少し近いと感じだしています」「まだ良く分からない存在だと感じています」(書き込み)

佐野：今日の目標はITを近いもの、使いやすいと感じてもらえるよう頑張って説明します。

■Microsoftが目指すもの、目標設定

佐野：少し哲学的な話ですが、今仕事で目指している建築や、創ろうとしている世界というのはどういったものでしょうか？

参加者：「居心地良い空間」「地域になじんでいくもの」「人に寄り添う空間」「人とまちを元氣する」「内臓感覚に訴える空間」(書き込み)

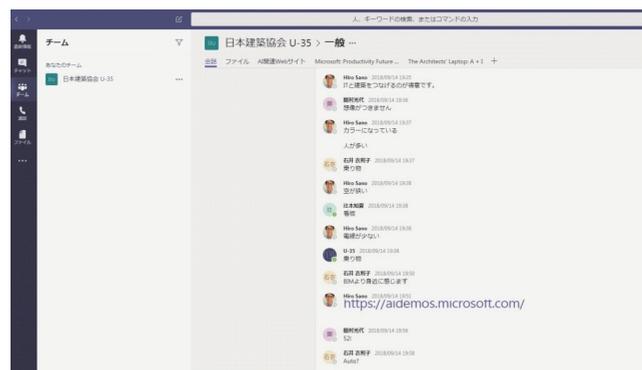
佐野：これがすごく大切なことだと思っています。仕事をする上で重要なのは何を指すのかが明快になっていることだと思います。Microsoftが目指している世界を動画で紹介します。

※動画内容は、「Microsoft:Productivity Future Vision」で検索。

この動画は2015年に作られたもので、Microsoftが今後5~10年で実現したい世界です。例えば、離れた場所の人たちと一緒に話をしたり、テーブルの上の3Dモデルで議論、画面を触って打ち合わせができたりという、すでに実現していることが多くあります。



佐野氏のプレゼンテーション



「Microsoft Teams」画面

2015年に定めた目標となる世界を実現するために日々努力しています。何をを目指すのかということをしっかり自分達で定めて、その明快な目標をどのように実現していくかを考えていくことが大切だと思います。

■そもそもAIとは？

佐野：AIって何の略でしょうか？

※残念なことに参加者全員が即答できず。。

アーティフィシアル インテリジェンスですね。日本語訳は人工的な知能という意味です。これだけでも、今日の会の価値がありましたね（笑）。AIに対して怖いイメージ、人間にとって替わるターミネーターみたいなイメージをもしかしたら持っている方もいるかもしれませんが、実際は全然違ってきます。AI技術は人を助ける、人がもっと様々な事を達成するために使うものです。Microsoftでは開発にあたっては、①プライバシーとセキュリティ、②透明性、③公平性、④信頼性、⑤多様性、⑥説明責任、という6つの倫理的要件を定めています。

■AI技術の進歩

佐野：AI技術は日々進歩しています。例えばミックスドリアリティやAIによる画像認識、音声認識や文章読解については人間の誤認識より高い精度となっています。機械翻訳も人間同等となる、AIは人間を超えつつあるのは皆さんのご認識の通りです。量子コンピューティングの進歩により膨大な計算を瞬時に行うことも可能となっています。

時間をかけている構造や環境のシミュレーションなども今後は一瞬で計算可能となるかもしれません。

※当日は事前提出した参加者の顔写真等を利用して画像認識の正確性や写真からいかに人の感情が読み取れるかをアプリケーションで実験しました。

■より建築とITを近づけるために

キーワードはどうやって“測るか”

佐野：より建築とITを近づけるためには先ほどの説明の通り、まずは自分たちが何を達成したいかという目標が最も大切であり、そのためにどのようにITを利用するのかを考えると良いと思います。その際に意識として新しく持ってほしい大切な事はどうやってそれを“測るか”ということです。自分達が提供する価値をどうやって“測るか”がITを取り入れるための一つのキーワード、最初のステップだと思います。

— 佐野氏から、旅行者と地域居住者が共に継続的に安心して快適に過ごせる「観光都市」を目指す例題が出題され、①行きたい場所に行き易い便利さ、②プライバシーと治安を守る環境、③昔ながらの地域の特徴やまちなみを残す、という3つのことを提供する価値としてどう“測るか”を構想段階、設計段階など、段階を踏んで考えてみた。

参加者：「死角の少なさを測る」「移動者数の多い少ないによって室や動線構成をする」「色」「まちの色」「犯罪件数」「タグ付け数」「入場者数」「レビューサイト」「滞在時間」「日常生活との重複」「地場素材の使用量」「Happiness判定される表情の割合」など。

佐野：皆さん上げてもらった上記のようなものが仮に測れば、便利さ、安全性、地域らしさなどの価値を一定量として測ることができるようになります。

“測る”、つまりまず可視化するということがとても重要です。見える状態にしたあとで、次にそれらはどう新しいのか、また何を優先し、どう順位づけるのかなど、測ったものの“扱い方”を考えることで、人々が豊かになる魅力的な提案が可能になります。これがIT活

用のためのストーリーです。

実際の測定方法については、難しい部分もありますが、“測りたいもの”さえあればさまざまな専門家にも協力してもらって実現していくというようなことも可能だと思います。

測るという視点があるため、このような色々なアイデアが生まれてくるのだと思います。

■おわりに

佐野：少し難しいかなという印象を持たれたかもしれませんが、やろうとしていることはITを使うということが目的ではなくて、“測る”という視点を持つことで、今やっている設計の幅を広げる、より多くのことを実現できるようにする、ということが重要です。提供しようとしている価値をどうやって可視化するかということを考える意識を持てば、すでに様々な新しい技術が開発されていますので、新しくITを取り入れていける、近づいていけると思います。ただ、実際にはどんなテクノロジーが開発されていて、どう使えるのかを知っていないと対応が難しいという課題もあるので、そこは、私たちのようなITの専門家に相談してもらえればと思います。ITやプログラムを通じて、一緒に新しい価値を提供できればと思います。

talk baton 14 を終えて

AI技術により職を失う危機感を感じ、そうならないような設計者になりたい、ならないといけなと考えていましたが、今回のtalk batonにより、ITやAI技術と上手に付き合っていきたいと感じました。

対 談 日：2018.09.14

場 所：サイバー空間

Microsoft Teams（アプリケーション）

モデレーター：宮武慎一

（安井建築設計事務所）



各事務所等で参加するトークバトン風景



参加者で二次会トークバトン